

非言語コミュニケーション

我々人間は、常に他者とのコミュニケーションを持とうとする「社会的動物」であると言われている。では、他者に知らせたい様々な事柄、つまりメッセージを伝える際、どんな手段が用いられているだろうか。多くの人々は、言語を第一にあげるだろう。確かに、メッセージを明瞭に表し、円滑なコミュニケーションを成立させるために、言語は大きな役割を果たしている。

しかし、コミュニケーションには、もう一つの重要な手段がある。それは例えば身体の動き、顔の表情、また、距離や空間のとり方などの言語以外の表現方法である。そして、このような手段は単独で使われることもあれば、言語と共に使われて相互補完的にあるいは補助的に機能することもある。例えば、駅へ行く道を聞かれた時、我々は方向を指差しながら説明することがあるが、この場合、指差すという身体の動きは、駅への道の言語による説明をさらにはっきりさせるために、機能しているわけである。研究者によって数値は異なるが、実は、対人コミュニケーションの 75%から 90%が「非言語」によるものだと言われている。習慣的、あるいは無意識に使われているとはいえ、「非言語」コミュニケーションが果たす役割はそれほど大きいものである。

それでは、異文化に属する人達がコミュニケーションを行う場合、言語や非言語表現はどう関わってくるのだろうか。言語は総合的に体系化されているので、学校などで意識的に学習することが可能である。したがって、これを使ったメッセージは、比較的、自分でコントロールしやすく、受け手にとっても解釈がしやすい。たとえ母語でなくても、語学力によって程度に差があるとはいえ、学習することで理解できるようになる。

一方、非言語表現は、前述のようにコミュニケーションの中に頻繁に現れていながら、言語のように意識的に学習しにくい。したがって、異なる国や文化の非言語表現に接した場

合、慣れている自国のものをよりどころにして解釈することになる。もちろん、すべてが文化によって異なるわけでもないし、全人類に共通したものもたくさんある。しかし、問題は、文化によって、同じことを異なる方法で表現する場合や、似たような表現が異なる意味を持っている場合である。

例えば、日本人は聞き手になった時、よくうなづく、つまり首を縦に振ると言われている。これは話し手に対する賛同や、「話を聞いていますよ」というサインであったりするが、おおむね、肯定の意味を持つ。ほかの多くの国でも、肯定を表す時には首を縦に振るという方法を用いているようだ。ところが、同じ肯定の表現でも、首を横に振る国民や民族もいるそうである。このように同じメッセージを伝える際にも、文化によってその表現が全く異なることもある。一方、一つの表現方法が、文化によって異なる意味のメッセージとなる場合もある。例えば、日本人は人にごちそうになる時は、出された料理を残すと失礼だと考える。だから、たとえ少しぐらい無理をしても、なるべく全部食べるようにする。それが、ごちそうがおいしかったというメッセージなのである。しかし、中国で同じことをすると料理がまだ足りないということになるそう。皿を空にすると、また次の料理がテーブルに運ばれてくるというわけだ。

このように習慣的に無意識に行われる動作は、外国人とのコミュニケーションに少なからず影響を及ぼし、ときには大きな誤解を生んでしまう。その上、お互いの非言語コミュニケーションの方法が違っていることに気づくのは大変難しい。言語の学習はもちろん大切であるが、異文化の非言語表現について学ぶ姿勢もぜひ持ちたいものである。そうすることで、外国人とのコミュニケーションがより多元的にとらえられ、相互理解の実現にもう一歩近づくことができるだろう。